

氏 名 寒 水 明 子

学位（専攻分野） 博士(学術)

学 位 記 番 号 総研大甲第358号

学位授与の日付 平成11年3月24日

学位授与の要件 文化科学研究科 地域文化学専攻

学位規則第4条第1項該当

学 位 論 文 題 目 『地域主義運動における言語と知識人

—エストニア南部ウツェル地方の事例から—』

論 文 審 査 委 員 主 査 教 授 松山 利夫

助 教 授 佐々木 史郎

助 教 授 庄司 博史

教 授 宮島 喬（立教大学）

教 授 原 聖（女子美術大学）

本論文では、1980年代末にエストニア共和国南部のヴォル地方ではじまった地域主義運動について、運動の担い手である知識人に焦点をあてて分析する。ヴォル地方はロシア共和国、ラトヴィア共和国と隣接し、人口の8割以上をエストニア系が占めている。彼らはヴォル人と呼ばれ、彼らの話す言語はヴォル語としてエストニア語の南部の諸方言に分類されている。ヴォル人やヴォル語という区分は、一般的にはエストニア人やエストニア語の下位概念として用いられているために、政府の統計資料などには「ヴォル人」といった民族範疇はなく「エストニア人」として一括されている。

第一章では、ヴォル地方とエストニア国家との関係の変遷を追う。13世紀のドイツ騎士団による征服以来エストニアは異民族に統治され、現在「エストニア人」と呼ばれている人々は農奴としてドイツ人荘園領主の支配下にあった。行政単位としてのヴォルが形成されるのは帝政ロシア時代（1783年）である。19世紀の民族覚醒期には標準語の制定や民俗資料の収集、民族叙事詩の創作などの文化運動を通じて「エストニア人」という民族意識が創られた。エストニアの独立期には、教育や各種の文化政策、マスメディアを通じて国家対地方、標準語対方言という上位概念と下位概念が人々の間に浸透した。ソ連併合後はソ連の民族政策や言語政策のもとで、エストニア人对ロシア人、エストニア語対ロシア語といった対立が人々の関心事となり、標準語の教育が徹底して行われた。ソ連からの独立回復後、エストニアは国家全体として見れば、バルト海を挟んで北欧諸国と接しているという地の利を生かして急速な経済発展を遂げている。しかし、ヴォル地方では逆に過疎や頭脳流出と言った社会経済的な問題が浮上している。

第二章ではヴォル出身の知識人について、19世紀後半に大規模な民俗資料収集活動を組織したヤーコブ・フルトとソ連時代の知識人ヘッラ・ケーム、そして現在のヴォル出身知識人の活動を対比させながら論じる。フルトは、政治的にも人口的にも弱小なエストニア人が周囲の民族に同化されずに存続するためには、「精神的に偉大になること」が重要であると説いた。彼はまた、民族意識にとっての言語の存在を重視し、エストニア語の標準化につとめた。独立期からソ連時代にかけて方言学者として活躍したケームは、民族覚醒期から独立期に形成されたイデオロギーを継承して、方言が標準エストニア語を豊かにする宝庫であると考えていた。ケームはソ連時代、現場のエストニア語教師による方言敵視の風潮に対して方言の擁護者であり続けたが、彼女の思想の中には方言を尊重し、擁護すべきであるという主張はあっても、方言を日常生活の中で積極的に使用すべきだといった主張はみられない。これに対して現代のヴォル知識人達は、ヴォル語を教育やマスメディアにおいて積極的に使うことを主張している。彼らのほとんどは、高等教育を受けるためにヴォルを離れ、ヴォルから北へ約60キロ離れたところにある都市タルト在住である。そのため彼らの運動は、しばしば地域住民からの反発を受ける。第二章ではその一例としてヴォルのローカルなラジオ局でヴォル語の番組制作にかかわっていたカウクシ・ユッレが、地元からの攻撃を受けてラジオから撤退した事件をとりあげ、知識人と地域住民との葛藤を描写する。

第三章ではヴォルの運動の中心的課題といえるヴォル語について、方言化の経緯と新正書法の提案をめぐる諸問題を中心に検討する。ヴォル語は19世紀末から今世紀初頭にか

けての標準エストニア語の形成過程において方言となり、エストニア語とヴォル語の標準語と方言という関係は独立期からソ連時代を経て定着する。もともとヴォル語には決まった正書法がなく、基本的にはエストニア語の正書法を代用し、あとは書き手の判断によって発音の補助となるような符号をつけていた。ヴォルの知識人達はヴォル語独自の正書法（新正書法）を考案したが、地域住民にとってはなじみがないアルファベットや符号を使用する新正書法は不評である。また、新正書法ではエストニア語では使用しないアルファベットを使用していることから、ヴォル語をエストニア語の方言とするイデオロギーが定着した人々にとってはにわかに受け入れがたいものがある。

第四章では、具体的な運動の内容を記述する。知識人達は、ヴォル語による読み書きを推進するためにヴォル語の暦や読本などの出版事業、児童生徒によるヴォル語の作文コンクールを行っている。毎年夏にはカイカ夏期大学を開催している。これは、ヴォル語を日常会話だけでなく公式の場で学術的な内容を話す際にも使用する試みであり、同時にヴォル語やヴォル地方の諸問題について知識人が地域住民と意見交換をする場となっている。一連の運動の結果、1995年には国立のヴォル研究所がヴォル市に設立されたが、文化面を重視した知識人達の運動は、社会経済的な問題の解決を望む地元の要請とは必ずしも合致していない。

第五章では、第一章から第四章までの議論をふまえた上で、ヴォルの知識人が分節化した地方アイデンティティと言語の関係について論じる。ヴォルの運動において常に中心的な位置を占めているのはヴォル語である。なぜならヴォルの人々は言語以外の面ではエストニア人に同化しており、少なくとも日常生活においてヴォルの伝統文化に接する機会はほとんどないため、ヴォルの独自性を強調する運動の要素としてはヴォル語が相対的に重要になってくるからである。しかし、言語を中心的なテーマに持ってきたために、ヴォルの運動は、国家語としてのエストニア語と方言としてのヴォル語という従来のエストニアのイデオロギーに反するために、地域住民からの反発を受ける。知識人達の対応は、ヴォル語をむしろ少数言語として積極的に主張することによってエストニア語との関係を切り離し、従来のイデオロギーからの脱却をはかるタイプと、国家と地方というエストニアとヴォルの関係を容認しつつもヴォル語をエストニア語の方言ではなく地域語として主張するタイプに分けることができる。双方ともロシアや西欧の少数言語集団の動きに注目し、連帯をはかっている。

近年西欧を中心にいくつか萌芽の兆しがみえる国家への統合が比較的進んだ集団の運動は、60年代や70年代の社会運動にくらべると、表面的には「盛り上がらない」印象を受けるため、これまで研究対象としては見過ごされがちであった。だが、「地味な運動がある」ということは「運動がない」ということと同義ではない。ヴォルの運動は、言語と集団のアイデンティティを一致させようとする点では非常にヨーロッパ的な事例である。だが、ヴォルの運動では、言語を中心とした国家形成や分離、自治の要求ではなく、少数言語集団や地域語としての認知要求や話者への啓蒙といった「地味」な主張をしており、それは現在西欧を中心に起こりつつある新しいタイプの運動に共通する特徴である。「地味」な運動の研究は、ヨーロッパの統合と分離という流れの中で、言語と民族、国家を結びつけてきたヨーロッパの近代国民国家イデオロギーによって塗り込められてきた他者の存在をどうとらえていくかという問題なのである。

論文の審査結果の要旨

本論文は、エストニア共和国南部、ヴォル地方に展開する言語文化運動を核にした地域主義運動の研究である。小国の中の一地域における運動の微妙な動きの記述・分析という先行研究が少ない領域にもかかわらず、エストニア語を駆使して可能な限りのデータを収集し解釈を試みたこの論文は、ヨーロッパにおける類似の運動の理解に一定のパーспекティブをもたらしたものとして高く評価される。

ヴォル地方を含めてエストニアは、中世のドイツ騎士団による征服後、1918年のロシア帝国からの独立と、39年のソ連併合を経て1991年の独立回復に至るまで、他者による長い支配のもとにあった。こうした歴史的経緯をふまえて第1章では、現在エストニア人（ヴォル地方の住民を含む）と呼ばれる人々の民族意識の創造と強化の過程を、エストニア標準語の制定や、民俗資料の収集と民族叙事詩の創作活動といった文化運動を通じて記述・分析し、当時における知識人がもった役割を明らかにする。

ついで第2章では、当時の知識人の1人で、19世紀後半に大規模な民俗資料の収集活動を組織しエストニア民俗学の父といわれるヤーコブ・フルトと、ソ連時代に諸方言はエストニア語を豊かにするものとの立場からヴォル語研究に指導的な役割を果たしたヘッラ・ケーム、および現在のヴォル運動の担い手をとりあげ、言語にかかわる三者の思想的差異を検証する。

第3章においては、現在の地域主義運動の中核をなすヴォル語について、ソ連時代における方言化の過程とそれが人々にもたらした意味、およびヴォル語正書法制定運動と地域住民の対応を、エストニア語の知識を駆使して克明に記述する。

さらに第4章では、現在の知識人によるヴォル語正書法の改良とその住民への普及を通じた「歴史的ヴォル地方」意識の啓蒙活動を、各種の運動とその在り方を主要な資料として分析し、それらの目的がヴォル地方の言語文化の保存と復興にある一方で、独立回復以来のエストニアの経済発展に取り残されたこの地方の活性化の戦略としての意味をもちつつあることを指摘する。この指摘は、1960年代から70年代にかけての西ヨーロッパにおける地域運動の発生の理解に通じており、説得性をもつものとなっている。

第5章では、これまでの議論をふまえて、ヴォル地方の運動が何故にヴォル語を中核に展開してきたのかを検討し、エストニア化したヴォル地方の人々にとってその言語こそが彼らのアイデンティティの表象であると主張する知識人と、ヴォル語は方言であるとするエストニアのイデオロギーになじんだ住民との間の相克を記述する。そうした中から、ヴォル地方における地域主義運動の主要な2つの潮流の芽生え—ヴォル語を従来のイデオロギーの枠組みから解放し、少数言語として積極的にヨーロッパ世界に主張しようとするもの、およびエストニアの1方言としてではなくヴォル語は地域語であるとするものの2つ—を明らかにする。

結論では、以上の議論を整理したうえで、既存の国家からの分離独立や自治権獲得を要求しないヴォルのこの運動が、西ヨーロッパに展開しつつあるような新しいタイプの運動であり、ヨーロッパ統合の中での少数言語とその担い手の処遇をめぐる問題への芽生えであると位置づける。

こうした内容をもつ本論文は、非常に手堅い堅固な構成をもつだけでなく、他者による

支配の時代から独立時までのエストニア・ナショナリズムの高揚期を経て独立回復後活発化しはじめる地域文化運動までの変動の過程が詳述され、興味深い東欧社会分析をなしている点が高く評価される。また、従来、ともすると言語文化は所与のものとして扱われがちであったが、本論文においてはそれを歴史の中で形成されるものとしている点、および農民や労働者による地域防禦指向と知識人の運動とを地域主義運動の中で把握している点など、多くの斬新な視点を含むすぐれた論考である。

このように本論文は充実した内容をもつが、若干の問題がないわけではない。それは、ソ連時代末期の言語運動から地域主義運動への転換とそれにもなう運動の変容の分析に紙数をさいたために、ヴォル地方住民の言語を除く文化の叙述が少ない点である。しかしこれは、議論をさらに深化するうえで求められるものであり、本論文の達成度そのものを損なうものではない。

以上のように、本論文は多くの新しい見解を提示したすぐれた論考であり、学位を授与するのに十分な価値を有すると認定する。